京都セミナー―洛西教会にて　（2017年2月9日）

枚方福音自由教会　水野健

日本文化宣教協力会「京都セミナー」（高山右近列福記念）が、洛西バプテスト教会を会場にして持たれ、15名の方々が集われました。

「高山右近列福式」が開催された直後でその記念となるセミナーをぜひ京都でということで、日本バプテスト連盟京都洛西教会（京都キリシタン研究家杉野榮牧師）で開催されました。

高橋敏夫牧師が「高山右近 と 茶の湯」について、杉野 栄牧師が、「キリシタン ミラー（魔鏡）」について、お二人が、熱く 語ってくださいました。

今回は、急な試みで、広く宣伝ができませんでしたが、インターネットの普及により、武者小路千家の木津宗詮宗匠、京都の西行庵の女将さん、高山右近研究家の久保田さん、嶋崎さん、そして、名古屋からの参加者があり密度の濃い集会となりました。

文化講演会 - 大船渡市にて　（2017 年 8 月 20 日）

気仙沼聖書バプテスト教会　日出忠栄

4年間続けて気仙沼で開催された「文化講演会」を、今年は少し北上して、同じ被災地の大船渡で開催しました。会場は、ほぼいっぱいでした。講演を聞かれた多くの方々に与えたインパクトが、これから徐々に現れることを期待して楽しみにしております。今回はほとんど女性ばかりでしたが、次回は男性に多く声がけして、「浜の男たち」に是非きかせたいです。

三陸沖は世界有数の漁場、また気仙地方(大船渡、高田)は「気仙大工」で有名です。また、方言、ナマリも独特で、山浦玄嗣(はるつぐ)医師(気仙語聖書を出した人物)は、イエス様はナザレで大工を経験され、又弟子たちはガリラヤの海の漁師も多い、言葉もナマリ(方言)の強い人達だ。だから、聖書を気仙語に翻訳した、と言われています。さらに今回の千年に一度ともいう大震災を経験し、助かって今生きている人たちです。

まさに「目を上げて畑を見なさい。色づいて刈り入れるばかりになっている」(ヨハネ4:25)と私は(地震被災者として)思っています。主の宣教の働きが、被災地でさらに前進しますように。

ご奉仕してくださった高橋敏夫先生、また春日部福音自由教会の皆様方に感謝するとともに、主からの豊かなねぎらいと祝福をお祈りします。

強力な被災地宣教の担い手として　（2017年8月20日）

日本同盟基督教団　東北宣教プロジェクト　齋藤満

6月頃、気仙沼聖書バプテスト教会の日出兄弟からこの文化講演をご紹介頂きました。私自身、高山右近や千利休への興味があったので、是非にとお願い、今回高橋先生をはじめ、山田先生、中西ご夫妻に来て頂き、楽しい講演会となりました。何より嬉しかったことが、これまで協働してきたノンクリチャンの方々が多数参加して下さったこと、そして現在住んでいる支援センターグレイスハウスの大家さんを始めとする近所の方が何名か来られたことです。仮設住宅でのイベントは人数も減り、縮小傾向にあります。その中でうまくこれまでの支援活動を教会の働きに橋渡ししていく足がかりとして今回の講演が用いられたことがとても良かったと思います。また元気で楽しい講演を聞けることを楽しみにしつつ。

カメリヤホールにて

「福音の真髄ーもてなしの心ー」　（2017 年 9 月 10 日）

上田福音自由教会教会員　坂口昌信

私たちの教会は1年に1度、普段とは違う切り口で福音を語ってくださる先生をお招きする聖日を設けていますが、今回（9月10日）は高橋先生にお出でいただき、「おもてなし」という私たちの心情にすっとはいってくる親しみやすい言葉をキーワードに礼拝でのみことばの解き明かし（表題）と「キリスト教と侘茶―キリシタン大名高山右近の茶道に学ぶ」と題した講演をしていただきました。

先生は幼少時代を信州で過ごされ、この上田も親しい思い出のある町であるということで身近に感じお話を伺うことができましたし、また笑いを誘う軽妙な語り口に引き込まれ、時間が経つのも忘れてしまいました。しかしその中に先生は伝えたい一番大切なところを私たちに鋭く迫られました。

午前中の礼拝ではマタイ7章12節～ 14節の「何事でも、自分にしてもらいたいことはほかの人にもそのようにしなさい。～狭い門から入りなさい。」から説き起こされ、私たちに対する神様の最高のおもてなし（十字架のキリスト）に、あるいは救いというもてなしに私たちがどうこたえるか。「もてなすことにいのちをかける」「惜しんではいけない」「すててこそ」「いのちは時間（日野原先生のことばを引用）、どう時間をささげるか」「私たちの心が命の道を狭くしている」等の言葉をもって私たちに問われました。

昼食とお抹茶をいただいたあとは前掲の講演をしていただきました。先生は高山右近と出会い、茶道に導かれ、茶道文化（侘び、もてなし）の中にキリストの足跡、十字架を見出していく旅をされてきましたが、その中から千利休の茶室のにじり口の思想、十字架を象徴した茶杓、十字の茶碗、右近の生涯等興味尽きぬお話をしていただきました。先生は日本の風土、土壌の中でいかに私たち日本人のこころに福音（神様のもてなし）を根付かせていくか40年間祈り求め続けてこられてといわれました。その熱い情熱をたっぷりいただくと共に、神様が先生をこのように用いられてこられたことをあがめ、感謝する初秋の一日でした。

恵みシャレー軽井沢セミナーに参加して　（2017年10月）

高崎キリストチャペル　　掛川正敏

人が世の中で生きていると様々な試練に会う。日常生活の中では嫌なことでも行わなければならない場面に遭遇する。そしてそれから逃げられない状況が大半なのが現実である。そんな中にあって、自分を省み神に祈りを捧げる時間を見つけ出すことが困難な時も多い。仕事や生活に流され、自分を忘れ、神を忘れてしまう状態に陥ることもある。

このセミナーを通じて「茶の湯とは、相手を思い自分を振り返り神を想う時間を作り出す行為なのかもしれない。」と考えるようになった。「市中の山居」「一期一会」とは今の時代にあっても重要な考え方・思想であると強く感じた。

利休や右近の生き方を知ることで茶の湯の所作・手前が合理的であることを知り自分の生き方に引き寄せることができたことは神の恵みに気づき信仰へと導かれたときと同様である。これを機会に、日本文化を学び聖書を学び自分自身を高める努力を続けようと思う。人生には修行も必要であり、茶の湯はそのひとつであると思い始めたこの頃である。